

# 琉球大学学術リポジトリ

日韓における小学校英語の効果の比較：  
中学校における英語能力判定テストとアンケート調査に基づいて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2015-11-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 賢, 宮里, 征吾, 石川, 瑞起, 小笠原, 剛士, Oshiro, Ken, Miyazato, Seigo, Ishikawa, Mizuki, Ogasawara, Tsuyoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/32316">http://hdl.handle.net/20.500.12000/32316</a>

# 日韓における小学校英語の効果の比較

～中学校における英語能力判定テストとアンケート調査に基づいて～

大城賢\*・宮里征吾\*\*・石川瑞起\*\*\*・小笠原剛士\*\*\*\*

## A Comparative Study of Elementary School English Education in Japan and South Korea Based on the Analysis of STEP Test and the Questioner

### 1. 研究の目的

日本では2011年度より外国語活動が必修化された。公益財団法人日本英語検定協会(2013)の調査によると第5～6学年で週1時間の外国語活動を実施している学校は82%、週2時間行っている学校は12%である。また、第3～4学年で、何らかの形で週1時間の英語教育を実施している学校は7%である<sup>1</sup>。一方、韓国では1997年度より小学校第3学年から教科としての英語が導入された。現在では小学校3～4年生で週2時間、5～6年生で週3時間の英語教育が実施されている。

小学校における外国語活動が日本で必修化されたから、まだ3年目であるが、教育再生実行会議では、早くも小学校の英語学習の抜本的拡充(実施学年の早期化、指導時間増など)が提案されている<sup>2</sup>。国際化の進展とともに、外国語教育の重要性が以前にも増して叫ばれるようになり、小学校の外国語活動をめぐる議論は今後ますます活発になっていくものと予想される。

そのような中、筆者らは日本における外国語活動の時間数の差がスキル面(リスニングや文字の

認識)に及ぼす影響について研究を重ね、授業時数や開始学年の違いがスキル面では有意な差を生み出していることを明らかにした<sup>3</sup>。今回は、日本よりも早く小学校の英語教育に取り組んだ韓国の学校を調査し、異なる指導条件(開始学年・授業時数)がスキル面や態度面にどのような影響を及ぼしているかを日韓の中学生の比較により検討するものである。

本研究により、日本における小学校外国語活動をめぐる議論に有益なデータを提供できるものと確信している。

### 2. 研究の方法

中学校へ入学後、約1年が経過した日本と韓国の中学生の英語力を公益財団法人日本英語検定協会の英語能力判定テスト(TEST D)を実施することにより比較・検討した。両国においては入学1年後の学習時間にはほとんど差がないことから、両グループを分ける大きな条件の違いは小学校での学習時間の差である。したがって、両グループに有意な差が認められるとすれば、1つの理由として小学校での学習時間の影響と考えることができる。

調査を実施した学校は、沖縄県内のJ中学校(1年生)、T中学校(1～2年生)、I中学校(1～3年生)、R大学附属中学校(1～2年生)の4校と

<sup>3</sup> JES全国大会発表資料「指導条件の違いがスキル・情意面に及ぼす影響：児童英検の結果を踏まえて」平成25年7月14日

\* 琉球大学

\*\* 那覇市立石田中学校

\*\*\* 琉球大学大学院

\*\*\*\* 公益財団法人日本英語検定協会

<sup>1</sup> 公益財団法人日本英語検定協会「小学校の外国語活動及び英語活動等に関する現状調査」平成25年3月

<sup>2</sup> 教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」平成25年5月28日

韓国江原道東草市にあるS公立女子中学校(1~3年生)である。東草市は人口9万人程度の地方都市で、S公立女子中学校は1学年8クラスの学校である。本研究ではS中学校と同じ地方都市にあり、かつ地域の平均的な学校であるJ中学校(1学年4クラス)を日本側の主な比較対象校として選定した。したがって主に取り上げる研究参加者は韓国のS公立女子中学校2年生117人と沖縄県にあるJ公立中学校1年生142人である(欠損データを除いた参加者数)。

韓国の2年生と日本の1年生を比較する理由は両国の年度の開始月の違いによる。調査を実施した平成25年の3月は、韓国の新年度が始まる月で、日本では年度が終わる月に当たる。同じ中学校1年生を比べたのでは入学したばかりの中学生と入学後1年近く経過した中学生を比べることになってしまう。そこで、入学後約1年が経過した韓国の中学校2年生と、同じく入学後約1年が経過した日本の中学校1年生を比べることが妥当であると判断した。

使用した英語能力判定テスト(Test D)は英検3級~5級程度の問題からできており、筆記50問(35分)、リスニング30問(15分)で満点スコアが460点である。筆記は「語彙・熟語・文法」、「英文構成」、「読解」の3つの分野からできている。

「語彙・熟語・文法」の問題は文脈から文章中の( )の中に適切な名詞、形容詞、動詞、前置詞などを選ばせる問題である。例えば次のような問題である<sup>4</sup>。

次の(1)から(30)までの( )に入れるのに最も適切なものを1, 2, 3, 4の中から一つ選びなさい。

(16)

A: When are we going to eat, Mom?

I'm really ( )

B: Around six.

1 hard 2 hungry 3 slow

4 interesting

(以下省略)

「英文構成」は文の構成に関わる知識を問う問題からできている。文を構成できる基本的な知識があるかどうかを問う問題である。例えば以下のような問題である。

それぞれの日本文の意味を表すように(31)から(35)までの1から5を並べ替えて文を作り、2番目と4番目にくる最も適切なものを一つずつ選びなさい。\*ただし、( )の中では、文のはじめにくる語も小文字になっています。

放課後ジミーと出かけてもいいですか。

Can ( 31 ) after school?

(31) 1 I 2 with 3 out 4 go 5 Jimmy

その絵についてどう思いますか。

What ( 32 )?

(32) 1 do 2 the picture 3 of 4 think 5 you

(以下省略)

「読解」の問題は2つの異なる文章を読ませて、それぞれ文章の内容が理解できているかを答えさせる問題である。1問目は単語数が約150語からできており、もう1問目は約250語からできている。日本の一般的な英語の教科書と比べると前者が中学2年生程度、後者が3年生程度の文章と考えてよい。

リスニングはPart 1 と Part 2 からできている。

<sup>4</sup> 公益財団法人日本英語検定協会「英語能力判定テストパンフレット」から抜粋した。以下、例題としてあげている問題も同様である。

る。Part 1 は短い対話を聞き、質問に答える形式、Part 2 は比較的長い文を聞き、その内容に対して答える形式である。

Part 1 の問題は例えば以下のようなものである。

対話を聞き、その質問に対して適切なものを 1, 2, 3, 4 の中から選びなさい。

【放送部分】

M: Cindy, do you want to go to the zoo on Saturday?

F: I'm sorry, I have to go to the airport to pick up my grandmother.

M: Oh, really? How long will she stay here?

F: For about two weeks.

Question

Where will Cindy go on Saturday?

【印刷部分】

- 1 To the zoo.
- 2 To the hospital.
- 3 To the airport.
- 4 To her grandmother's

(以下省略)

また、テストと同時に、英語に対する態度面の調査（アンケート）を行い、両グループを比較した。アンケートは10問からできている。アンケート項目は以下のとおりである。

質問 1. 中学校に入学する前、英語は好きでしたか。

- ①とても好きだった
- ②どちらかという好きだった
- ③あまり好きでなかった
- ④嫌いだった

質問 2. 現在は英語の勉強は好きですか。

- ①好き
- ②どちらかという好き
- ③どちらかという嫌い
- ④嫌い

質問 3. 英語の授業はどのくらい理解していますか。

- ①70%以上理解している
- ②半分くらい理解している
- ③30%くらい理解している
- ④ほとんど理解していない

質問 4. 自分達が大人になる頃には、今よりも英語を話す必要がある社会になると思いますか。

- ①とてもそう思う
- ②まあそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④まったくそう思わない

質問 5. 将来、外国に留学したいと思いますか。

- ①とてもそう思う
- ②まあそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④まったくそう思わない

質問 6. 英語ができると、将来、いい仕事につけると思いますか。

- ①とてもそう思う
- ②まあそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④まったくそう思わない

質問 7. 家で授業（英語）の予習はしますか。

- ①ほとんどしている
- ②時々している
- ③ほとんどしていない
- ④まったくしていない

質問 8. 家で授業（英語）の復習をしていますか。

- ①ほとんどしている
- ②時々している
- ③ほとんどしていない
- ④まったくしていない

質問 9. 英語の宿題はしていますか。

- ①ほとんどしている
- ②時々している
- ③ほとんどしていない
- ④まったくしていない

質問 10. 現在、学習塾（英語）に行っていますか。

- ①行っている
- ②行っていない

以上のテストとアンケートを平成25年3月に実施し、そのデータを比較分析することにより両国の小学校英語の態度面に及ぼす影響の比較を行った。

### 3. 結果と考察

入学後1年が経過した日本のJ中学校1年生(142人)と韓国江原道S中学校2年生(117人)を比較したところ、平均点220.8点(標準偏差53点)と308点(標準偏差89.7点)であった。日本と韓国との間で平均値の差に関するt検定を行った結果、統計的な有意差が認められた

( $t=9.746$   $df=257$   $p<.01$ )。

ちなみに同じ問題を受験した沖縄県内のJ大学附属中学校2年生(152人)の平均は303.2点で韓国のS中学校とほぼ同程度である。つまり、韓国の1年生修了レベルと日本の国立大学附属中学校2年生の修了レベルがほぼ同等であることが示唆された。

参考までにT公立中学校2年生(186人)の平均点は249.1点である。つまり、韓国の中学校に入学した1年後の中学生と、日本の公立中学校に入学した2年後の公立中学生を比較すると平均で約60点の差があることがわかった。

(表1)

t分布による2群の母平均の差の検定			母平均の差の検定		
基本統計量			t検定		
変数	韓国S中学校	日本J中学校	統計量:t	9.746	
N	117	142	自由度 (df)	257	
平均	308.299	220.782	両側P値	0.0000	**
不偏分散	8041.556	2811.704	片側P値	0.0000	**
標準偏差	89.675	53.026	検出力( $\alpha=0.05$ ・両側)	1.0000	

また、「語彙・熟語・文法」、「英文構成」、「読解」、「リスニング」の各分野を韓国のS中学校と日本のJ中学校で比較したところ、正答率はこの分野においても韓国のS中学校が上回っている。特に英文構成の分野では正答率の差が大きく、その差は36.8点である。分野毎の正答率をみると、「語

彙・熟語・文法」の分野の正答率が最も高く、次に「リスニング」、「読解」、「英文構成」となっており、正答率においては両グループとも同じ傾向を示している。

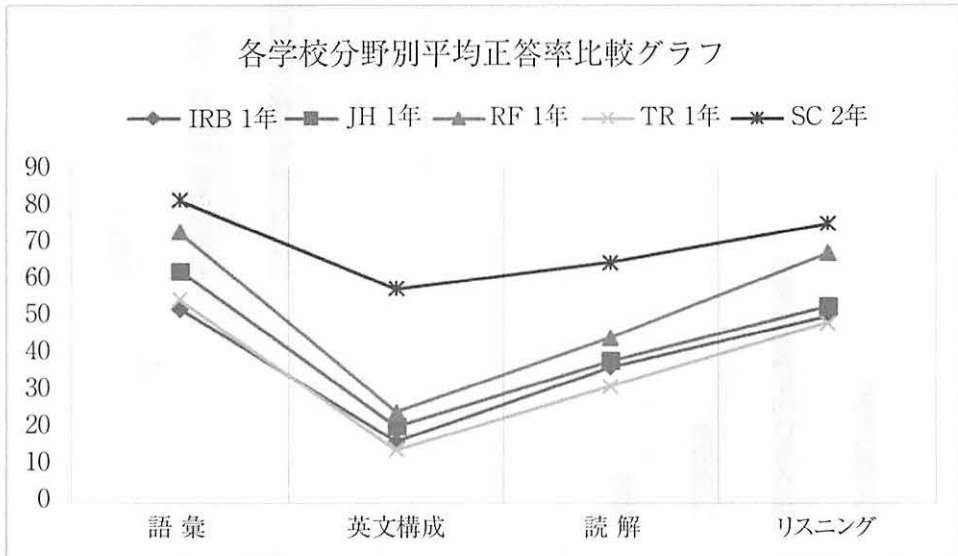
(表2)

	語彙	英文構成	読解	リスニング
韓国S中学校	81.2405	57.35537	64.51736	74.87769
日本J中学校	62.07808	20.54795	38.07945	52.62534
平均差	19.16241	36.80743	26.4379	22.25234

グラフ1は韓国のS中学校2年生と今回調査した日本の全ての中学校1年生の分野別平均点を示したグラフである。調査した日本の全ての中学校よりも韓国のS中学校のほうが平均点が高い。

また、分野別の正答率においてはどの学校においても「語彙・熟語・文法」が最も高く、「英文構成」が最も低いなど同じ傾向を示している。

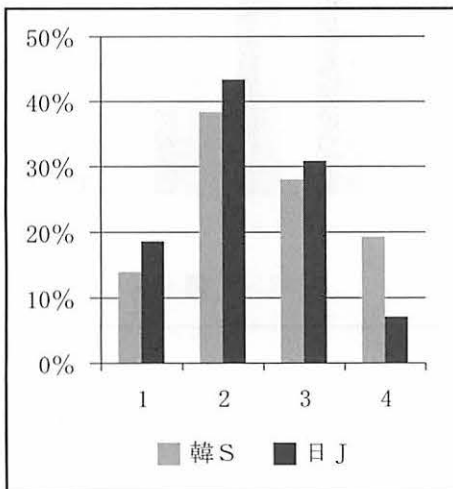
(グラフ1)



【注】韓国の2年生は入学後約1年後の時期。日本の中学校1年生も同じく入学後約1年後の時期である。

次に両国（韓国のS中学校と日本のJ中学校）の態度面に関するアンケートを比較する。以下は両国のアンケートの結果（一部）を棒グラフに示したものである。1は「とても～である」、2は「まあまあ～である」、3は「あまり～でない」、4は「まったく～でない」を示している。

1 入学前、英語は好きでしたか。(質問1)  
(グラフ2)



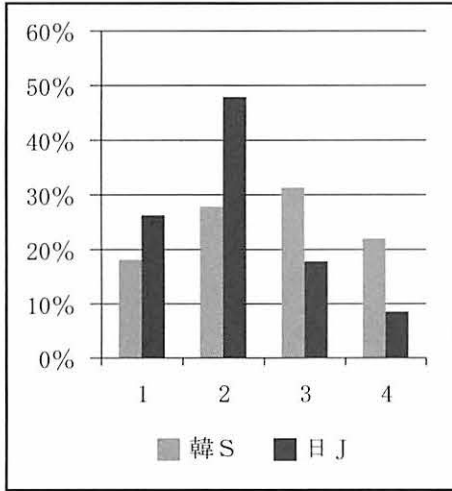
韓国の小学校は前述したように3年生から4年生までが週2時間、5年生から6年生までは週3時間である。小学校での英語学習の総時数は350時間となる。調査対象となった日本のJ中学校の場合は、小学校3年生から6年生まで週1時間の英語学習を行っており総時数は140時間となる。韓国の場合は教科としての実施であり、高学年では文字の指導も行われている。一方、日本の場合は領域としての実施であり、文字の指導は基本的に行っていない。

「とても好きだった」「好きだった」を合わせると韓国が53%で日本が62%となっている。日本のJ中学校のほうが10%程度多いことがわかる。ベネッセ(2009)は全国の中学校2年生を対象にアンケート調査を行っている。「中学校に入学する前に英語は好きでしたか」という質問に対し「好き」(11.7%)、「どちらかというが好き」(33.3%)で両方を合わせると55.6%となっている。また、石川(2013)の調査では、中学2年生(3校107名)の38.3%が「とても好き」「好き」と回答している。これらの結果を比べると「入学する前に英語が好

きだった」というのは、むしろ韓国の方が多い。韓国のS中学校の生徒は一般的な日本の児童とくらべると小学校時代に質、量ともに大幅に上回る英語の授業を受けてはいるが、だからといって特別に英語嫌いが増えたということはないということが示唆される。

2. 現在、英語は好きですか。(質問2)

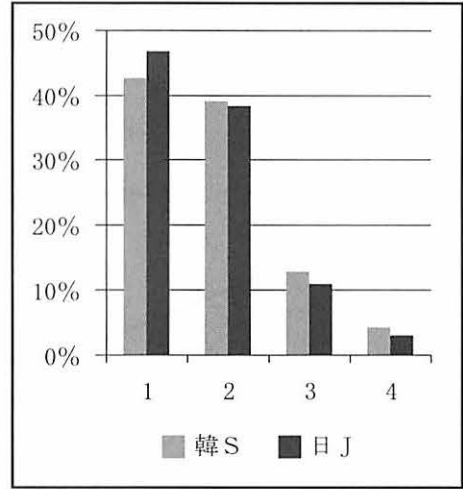
(グラフ3)



「現在、英語が好きかどうか」を聞いたところ「とても好き」「好き」を合わせた割合は韓国S中学校が46%、日本のJ中学校が74.7%で、両者には大きな開きがある。ベネッセ(2009)が全国の2年生を対象に調査したところ「英語が好き(とてもあてはまる) + (まああてはまる)」は36.2%である。調査対象のJ中学校はベネッセの平均と比べるとかなり高い数字を示しており、やや特殊なケースと考えられるかもしれない。

3. 英語は将来必要な社会になると感じますか。(質問4)

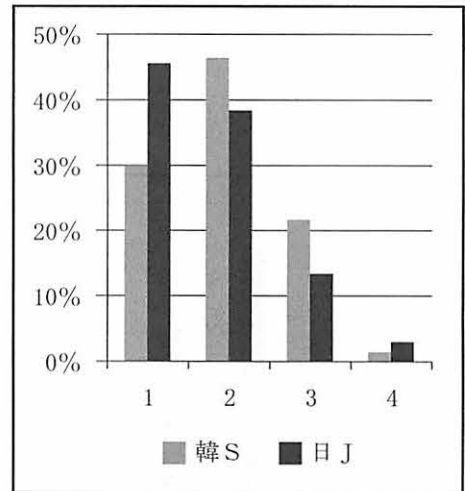
(グラフ4)



「英語は将来必要な社会になると感じますか」という質問に対しては、両者ともに大きな差はない。どちらにおいても80%以上の生徒が「英語は将来必要な社会になると感じている」ことが明らかになった。

4. 英語ができると将来はいい仕事につけると感じますか。(質問6)

(グラフ5)

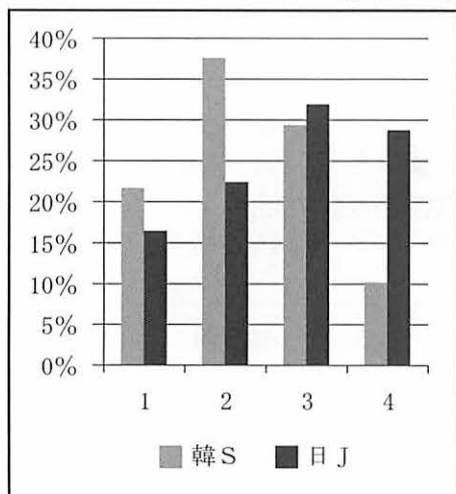


質問4と類似した質問である。「英語ができると将来はいい仕事につけると感じますか」とい

う質問に対して、「とてもそう思う」と答えたのは韓国のS中学校が30%で日本のJ中学校が45.8%である。「とてもそう思う」と「そう思う」を加えた割合は韓国が76%、日本が83.8%である。英語ができると将来よい職業に就けると思っている中学生は日本のほうが多いことがわかる。

5. 将来は留学したいと思いますか。(質問5)

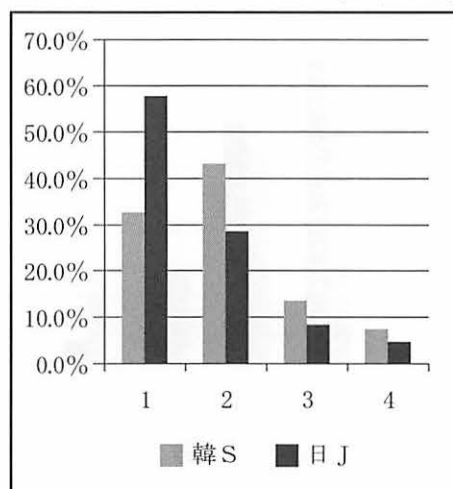
(グラフ6)



「将来は留学したいと思いますか」という質問に対しては、明らかに両者には差がある。「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせると韓国は60%であるが、日本は38.7%である。質問4で「英語は将来必要になると思いますか」という質問に対し、両国とも同じように80%以上の生徒が「そう思う」と答えているにもかかわらず「留学したい」と思う生徒は圧倒的に韓国のほうが多い。

6. 宿題はしていますか。(質問9)

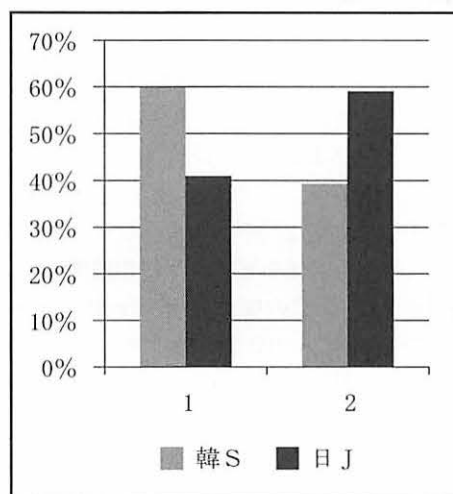
(グラフ7)



「宿題はしていますか」という質問に対し、韓国のS中学校は58%が「ほとんどしている」と答えている。日本のJ中学校の場合は34.5%で、韓国の半分程度の割合である。

7. 学習塾に行っていますか。(質問10)

(グラフ8)

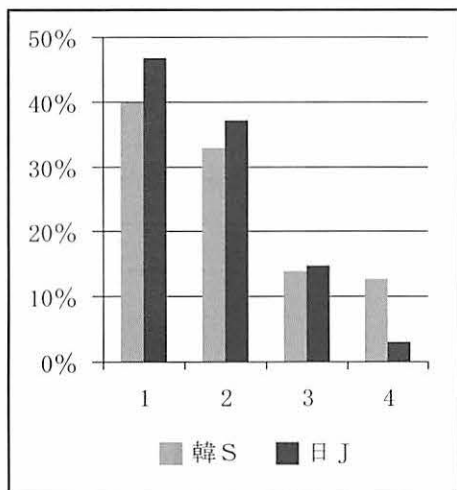


通塾率は韓国S中学校のほうが60%で日本のJ中学校が40%である。学校以外でも学ぶ生徒が多いことが今回のテスト結果にも影響しているかもしれない。



8. 授業をどのくらい理解していますか。

(グラフ9)



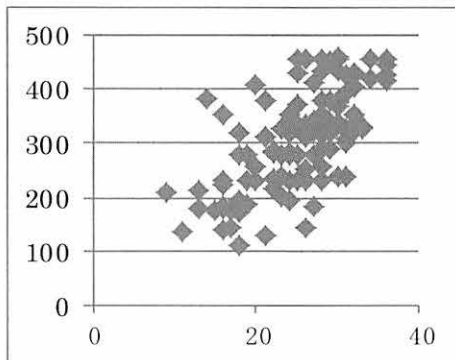
授業の理解度については「よく理解できる」と「だいたい理解できる」を合わせると韓国のS中学校が74%で日本のJ中学校が77%とほとんど変わらない。しかし、「まったく理解できない」をみると韓国のS中学校が12%で日本のJ中学校が2%である。理解できないまま授業を受けている生徒は韓国のS中学校ほうが多いのかもしれない。

最後に両グループでテストの点数と態度面の相関を調べた。態度面は前述したアンケートの回答項目を点数化した。例えば質問1の「中学校に入学する前、英語は好きでしたか」という質問に対して「①とても好きだった」を4点、「②どちらかという好きだった」を3点、「③あまり好きでなかった」を2点、「④嫌いだった」を1点とした。両者の関係をピアソンの相関係数で調べた。韓国のS中学校の場合、結果は $r=0.65$ であり、無相関の検定は $p<0.05$ で有意であった。以上のことから、このサンプルの2つの得点には中程度の相関があることがわかった。

(表3)

	韓国スコア	態度面合計
韓国スコア	1.0000	0.6540
態度面合計	0.6540	1.0000

(図1)

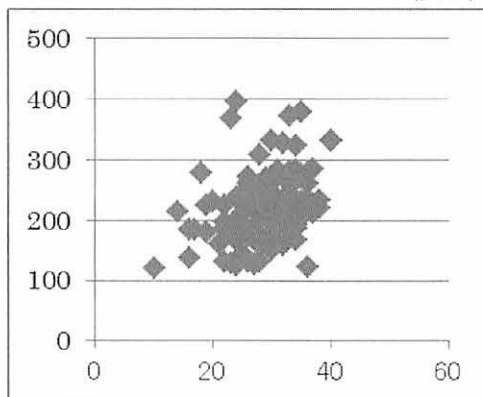


日本のJ中学校の場合も同じくピアソンの相関係数で調べた。結果は $r=0.36$ で無相関の検定は $P<0.05$ であった。以上のことから、このサンプルの場合は弱い相関があることがわかった。

(表4)

	情意面	スキル面
情意面	1.0000	0.3655
スキル面	0.3655	1.0000

(図2)



前述したとおり、韓国のS中学校の場合にはテストスコアと態度の相関は中程度である。成績が良ければ良いほど、好ましい学習態度が育成されている傾向があると言える。しかし、日本のJ中学校の場合には、「弱い相関」となっている。テストスコアが高いのに、「好ましい態度」が育成されているとは限らず、また、逆に「好ましい態度」は育成されているが、テストスコアが低いという

例が散見される。日本の場合、小学校の外国語活動は意欲・関心・態度の育成を重視しているが、それが必ずしもテストスコアにつながっていないということが言えるのではなからうか。

#### 4. 結論

入学後1年が経過した日本のJ中学校1年生(142人)と韓国江原道S中学校2年生(117人)を公益財団法人日本英語検定協会の英語能力判定テストを使って比較したところ、平均点220.8点(標準偏差53点)と308点(標準偏差89.7点)であった。日本と韓国との間で平均値の差に関するt検定を行った結果、統計的な有意差が認められた( $t=9.746$   $df=257$   $p<.01$ )。この差を生み出したものは入学後の学習状況の差(通塾率が高い、家庭学習をする生徒が多い)も考えられるが、最も大きな要因は小学校における時間数の違いと考えられる。

日本のJ中学校と韓国のS中学校のスコアで最も差がひらいたのが英文構成に関する問題(並べ替え問題)である。日本の中学生の場合は韓国の中学生と比べ、英語の文を構成する上で基本的な文法の知識が定着していないと考えられる。高島(2011)らの調査でも、日本の中学生はSVOのみの単純な構造の場合は正答率が高いが、副詞句などが入ると、\*Do you at school study Japanese?の選択肢を選ぶなどして正答率が低下し、さらにSVOO, SVOCなどの構造は正答率が60%に留まり中学校第2学年から第3学年へと学年が進行してもその習得状況には変化が見られなかったと報告している。波照間(2013)においても、英語検定試験問題を使って分析したところ、彼の学校の中学生は語順の問題で最も正解率が低かったということを報告している。このことは、韓国と比べ、日本の中学校では文法(語順)などの定着を図る学習があまり行われていないのではないかと思われる。小学校ではfluencyを重視しながら外国語活動を行うが、その後の指導ではaccuracyに重点を移すなどの指導が望まれるのではなからうか。

韓国の小学校では文字を含めたスキルの育成を主な目的として指導を行っている。日本では態度

面の育成に重点を置いている。しかし、入学1年後に小学校の英語学習について振り返ってもらったところ「(小学校時代に)英語が好きだった」という割合はほとんど変わらない。韓国のように時間数を増やし、スキルを重視したとしても、英語の好き嫌いには影響しないのではないかということが示唆される。

以上のことから英語学習に充てる時間数が英語力に大きく影響していることが明らかである。また、時間数やスキルを重視したからといって、それが直接的に英語嫌いを生み出すことはないことも明らかになった。

今回は中学校入学後1年が経過した中学生を対象に調査を行い、その結果をもとに小学校における英語教育の効果について検討してみた。今後は小学校卒業時点での調査を行い小学校英語の効果と比較すると同時に、中学入学1年後、2年後、3年後で追跡調査を試み、小学校英語の効果をさらに検討する必要がある。

付記：本研究は公益財団法人日本英語検定協会の受託研究(韓国における英語教育の総合的研究)を受けて行った研究成果の一部である。また、調査にあたっては琉球大学教育学部の韓晶完准教授、韓国江原道外国語教育院のWoong Lee氏、東草女子中学校のHo-jin Chee氏に大変お世話になった。記して深く感謝の意を表したい。

#### 【参考文献】

- 石川瑞起(2013)「中学生の英語学習における学習意欲喪失要因の研究」琉球大学教育学部英語教育専修卒業論文  
教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」平成25年5月28日  
公益財団法人日本英語検定協会(2013)「小学校の外国語活動及び英語活動等に関する現状調査」  
高島英幸編著(2011)『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』大修館  
波照間永樹(2013)「コミュニケーション能力を育成する授業の工夫」鳥尻教育研修所研究報

告書  
ベネッセ（2009）「第1回中学校英語に関する基本調査報告書」

JES 全国大会発表資料「指導条件の違いがスキル・情意面に及ぼす影響：児童英検の結果を踏まえて」平成25年7月14日